

感謝に対する応答の日韓比較 —大学生を中心に—

呉 惠卿・金 明熙

[要旨]

感謝場面におけるこれまでの研究は「感謝の表明」に重点が置かれており、連鎖して行われる「感謝表現への応答」はあまり注目されてこなかった。感謝の表明という行為がそれぞれのことば共同体による社会文化的特殊性を保つように、その感謝表現に対してどのように言い返すのかということも、同じくことば共同体の相互行為的規範を反映する。本稿では、上下・親疎関係、負担程度などを細かく設定した談話完成テスト (Discourse Completion Test、以下 DCT) を行い、日韓の大学生は相手からの感謝に対してどのように応答しているのかについて分析及び考察を行った。分析の結果、日韓の大学生は、与えられた場面や状況に応じて社会的要因を反映しながら様々な応答表現を選択して使い分けていることがわかった。また、日本では失礼な言語行為として誤解される余地のある表現が、韓国では状況に応じて用いられるなど、同じような応答表現が日韓で異なって解釈されることもあった。

[キーワード]

感謝場面、応答ストラテジー、対照研究、日本と韓国、大学生

1. 本稿の目的と意義

挨拶は、人間関係の構築に重要な役割を担う情のあるいは交感的コミュニケーション (phatic communication) (Jakobson, 1960; Malinowski, 1923) の一つとして、話し手と聞き手のコミュニケーション・チャンネルを開放し、人間関係を交渉する潤滑剤として機能する (金・呉, 2020)。ことば共同体 (speech community) において長い時間を経て構築された習慣的な言語行動としての挨拶は、その共同体で社会文化的に望ましいとされる礼儀や信念体系、価値観などを反映した相互行為的規範に基づいて行われる。従って、挨拶行為の分析は個別のことば共同体で社会文化的に望ましいとされる諸言語表現を明らかにするための良い題材であるといえよう。そこで本稿では、挨拶行為の一つとして、感謝場面における言語行動を取り上げる。

日常生活の中で、人々は言語行動または非言語行動を通して常に相手との関係を交渉しながら相互行為を行っている。しかし、相手側からプレゼントをもらったり、助けてもらったりして負い目が発生した場合、相手との人間関係のバランスは崩れてしまう。感謝場面における言語行動は、そのバランスを調整または再調整しようとする努力の一環として行われる相互行為であり、「感謝の表明—感謝に対する応答— (感謝の再表明) — (感謝に対する応答)」といった、連鎖的に行われる一連の言語的パフォーマンスである。相手に負い目を感じた際に、人々は相互関係における崩れたバランスを取り戻すために、

場面や状況に合わせて様々な感謝表現を戦略的に駆使して調整を行う。一方、感謝された相手も負担の程度や相手との関係などを反映し、相手からの感謝表現に対して応答をすることになる。感謝の表明という行為がそれぞれのことは共同体による社会文化的特殊性を保つように、その感謝表現に対してどのように言い返すのかということも、同じくことは共同体の相互行為的規範を反映して行われる。それ故、人々が社会文化的に適切とされていない表現を使って感謝への応答をした場合、誤解が生じてしまい、相互コミュニケーションは語用論的失敗につながる恐れがある。本稿は、感謝の挨拶を交わす場面で、日韓の人々がそれぞれどのような言語表現を駆使して相互行為を行っているのかを、感謝表現に対する応答に重点をおいて分析及び考察を行い、日韓の言語使用における相互理解を深めることをその目的とする⁽¹⁾。

2. 先行研究及び本稿の位置づけ

西 (2006b) でも指摘されているように感謝場面におけるこれまでの研究は「感謝の表明」に重点が置かれており、連鎖して行われる「感謝表現への応答」はあまり注目されていなかった。感謝への応答を取り上げた日本の研究として社会言語学的に興味深いのが、日本とアメリカとの言語行動を比較した國廣 (1977) である。國廣 (1977) によると、日本語文化では感謝への応答として、言語行動以外に、軽い会釈や笑顔、頷きなど、非言語行動が多く用いられているが、それは自分の行動がわざわざ感謝されるほどではないということの表明だと述べている。日本語話者が感謝に対して「いいえ」や「どういたしまして」といった打ち消しの応答をすると他人行儀のひびきがするため、それを避けるために非言語行動に取り換えているという解釈である。國廣 (1977) の研究に触発され、西 (2006a) は鹿児島市内で調査を行い、通行人に道を教えてもらったり写真を撮ってもらうなどしてお礼の言葉を述べた後の相手の応答を、言語行動と非言語行動に分けて記録した。その結果、無言が全体の半数を占めており、「無言+笑顔」、「無言+笑顔+会釈」など、非言語行動のみで応答する割合が非常に高く、日本語教材で当然のように書かれている「どういたしまして」の使用例は284例のうち、わずか2回にとどまっていると述べている。

韓国語における感謝への応答を取り上げた研究も最近になって少しずつ見えてきているが、その数は非常に少ない。박 (2000) は、韓国人話者と英語圏の韓国語学習者を対象に韓国語における感謝への応答表現を比較分析し、韓国語話者は年齢、社会的地位、心理といった社会的要因を反映して様々な談話ストラテジーを駆使するのに対して、英語圏の韓国語学習者は、状況や社会的要因などを考慮せずに、「괜찮아요. (大丈夫です。)」や「천만에요. (どういたしまして。)」など、韓国語教材に書かれている表現をドリル方式でそのまま暗記して使う傾向にあると述べている。韓国語話者を対象に行った召 (2016) と丞 (2017) は、談話ストラテジーの観点から社会的要因を取り入れた分析を行い、韓国人は感謝に対する応答として非言語行動を含めた様々な表現を戦略的に駆使していると語っている。

以上、日本と韓国における感謝場面の応答に関連する研究を概観したが、これまでの研究では社会的地位や親疎関係といった社会的要因は取り入れているものの、感謝の場

面や状況に応じて感謝表現に対する応答がどのように異なって表れているのかについては、具体的な記述や分析が行われていない。金・呉（2020）でも述べているように、談話ストラテジーは場面や状況に応じていつでも流動的に修正、変更される可能性がある。各場面に適切な戦略を使用できなかった場合、学習者の語用論的な失敗に繋がる可能性も排除できないため、場面や状況によってどのような談話ストラテジーが用いられているのかを明らかにすることは非常に重要である。これまで感謝場面に対する応答を取り上げた研究は日本と韓国でそれぞれ行われているが、両言語の話者を対象にした対照研究は全く行われていない。日本語と韓国語は文法的に似通っており、相互行為の際に学習者が自分の母語をそのまま直訳して使ったり、あるいは自国語の規範に基づいて相手の言語使用を解釈することがある。しかし、このような言語使用は語用論的な失敗に繋がる可能性が高く、相手との人間関係を調整する感謝場面において日韓の話者間にミスコミュニケーションが行われる恐れもある。従って本稿では、日本と韓国でそれぞれ行われた研究を補完・発展させる形で、社会的地位や親疎関係、負担程度など、様々な社会的要因を考慮した DCT を日韓の大学生に行い、集団と社会的要因という変数に加え、場面や状況によって、感謝表現に対する応答が日韓でどのように異なって用いられているのかについて分析と考察を行う。

3. 調査の概要

感謝場面における応答表現の分析のために、2017年6月12日から6月23日までの2週間にかけて、東京居住の日本人大学生37人、釜山居住の韓国人大学生40人を対象にDCTを実施し、データ収集を行った。本調査に協力した日本人大学生は英語と韓国語を、韓国人大学生は日本語をそれぞれ専攻しているが、特に意図しているわけではない。DCTは、18問の質問紙を日本語と韓国語でそれぞれ作成して教室で配布し、日韓の大学生は与えられた状況でどのように回答をするのかについて自分の母語で自由記述形式に回答してもらった。また、本調査とは別途に、「恩返しの要求」という特定の応答ストラテジーについて日韓の大学生はどのように認識しているのかを調べるために、選択式回答を1問追加で作成して調査を行った。

DCTの内容を構成するにあたって、感謝表現が行われる場面や状況の設定についてはCoulmas (1981) の「感謝の対象 (the object of gratitude)」を参考にした。Coulmas (1981) によると、「感謝の対象」は感謝場面における言語使用に影響する要因として働いており、言葉を通して現れる感謝表現は、恩恵を施した人による行為又はその行為の結果と関係がある。Coulmas (1981) では、「感謝の対象」を4つの場面に区分し、各場面を、(1) 感謝表現が使われた時点、(2) 感謝表現が使われた状況、(3) 感謝行動における依頼の有無、(4) 実際受けた恩恵の有無などに分けている。さらにCoulmas (1981) では、感謝の時点と状況を2つの状況に細かく分類し、(1) 感謝表現が使われた時点については、感謝行動に対する「事前の感謝」なのか、それとも「事後の感謝」なのか、(2) 感謝表現が使われた状況については、贈り物のような「物質的なもの」に対する感謝なのか、それとも相手側からの褒めや情報の提供など「非物質的なこと」に対する感謝なのかにそれぞれ分けている。(3) 感謝行動における依頼の有無については、

「相手側からの自発的な好意」で恩恵を受けている状況なのか、それとも「自分の依頼や指示」などによって恩恵を受けた状況なのか、(4) 実際受けた恩恵の有無については、接客の場面などで儀礼的に発話される感謝表現のように、相手から恩恵を受けていないのに発話されたものなのか、それとも実際に恩恵を受けて発話されたものなのかによってそれぞれ細かく分けられている。本調査では、感謝応答表現が行われる場面設定にあたって、相手側の行動やその行動の結果によって恩恵を受けた人が感情的負債を感じて感謝表現を伝える状況のみを対象にしており、まだ具体的な恩恵を受けていない事前の感謝や、サービスの場面で習慣的に発話される感謝表現は調査項目から外した。そして、相手から恩恵を受けて発話された事後の感謝のみを対象にし、〈表1〉のように、物質の提供に対する感謝への応答なのかどうか、及び相手からの自発的な好意に対する感謝への応答なのか、それとも自分の依頼によって行われた好意に対する感謝への応答なのかに重点をおいて分析を行った。なお、大学生を対象とする調査であるため、DCT調査にあたって、大学生の日常生活の中で想定可能な場面を設定しようと心がけた。

表1 感謝応答の場面

場面 I	物質的なものに対する感謝応答	+	自分からの自発的な好意に対する感謝応答	⇒	自分からの好意で贈り物、食事のご馳走、お礼の食事のご馳走を行った場合
場面 II	非物質的なものに対する感謝応答	+	相手側からの依頼などによる結果に対する感謝応答	⇒	相手からの依頼で助けてあげた場合

さらに本調査では、同じような場面でも社会的要因によって感謝応答表現が異なって現れる可能性を想定し、上記の「場面 I」(6問)と「場面 II」(12問)を「社会的地位」、「親疎関係」、「負担程度」(Brown & Levinson, 1987)の3つの要因に分け、〈表2〉のように全18問のDCTを作成した。Brown and Levinson (1987)では、各文化の特殊性を構成するものとして、(1)社会的な権威、(2)社会的距離、(3)負担程度など、3つの要素をあげている。社会的な権威とは、社会的地位の上下関係を、社会的距離とは話し手と聞き手の親疎関係をそれぞれ意味し、負担程度は話し手の発話内容が聞き手にどれだけ負担を与えるのかを指標する⁽²⁾。そのほか、性別や年齢も文化を特殊づける要因となっているが、本調査が日韓の大学生を対象に行っていること、被験者が女性に偏っているという理由で、今回は分析の対象から外した⁽³⁾。

表2 DCTの構成内容

【場面Ⅰ】自分からの好意で贈り物、食事のご馳走、お礼の食事のご馳走を行った場合

社会的地位	親疎関係	状況	問
上 (教授)	親	授業時間に親しい教授に旅行の土産として買って来た菓子を渡した。(贈り物)	1
	疎	授業時間にあまり親しくない教授に旅行の土産として買って来た菓子を渡した。(贈り物)	2
同 (友人)	親	親しい友人に昼食をご馳走した。(食事のご馳走)	3
	疎	先日世話になったあまり親しくない友人にお礼の意味で昼食をご馳走した。(お礼の食事のご馳走)	4
下 (後輩)	親	親しい後輩に昼食をご馳走した。(食事のご馳走)	5
	疎	先日世話になったあまり親しくない後輩にお礼の意味で昼食をご馳走した。(お礼の食事のご馳走)	6

【場面Ⅱ】相手からの依頼で助けてあげた場合

社会的地位	親疎関係	負担程度	状況	問
上 (教授)	親	大	親しい教授が資料収集を手伝ってほしいと言うので数日間探して持って行った。	7
		小	親しい教授が資料をコピーしてほしいと言うのでコピーして持って行った。	8
	疎	大	あまり親しくない教授が資料収集を手伝ってほしいと言うので数日間探して持って行った。	9
		小	あまり親しくない教授が資料をコピーしてほしいと言うので持って行った。	10
同 (友人)	親	大	同じ授業を受ける親しい友人が英語資料の翻訳を手伝ってほしいというので手伝ってあげた。	11
		小	同じ授業を受ける親しい友人が本をちょっと見せてほしいというので見せてあげた。	12
	疎	大	同じ授業を受けるあまり親しくない友人が英語資料の翻訳を手伝ってほしいというので手伝ってあげた。	13
		小	同じ授業を受けるあまり親しくない友人が本をちょっと見せてほしいというので見せてあげた。	14
下 (後輩)	親	大	同じ授業を受ける親しい後輩が英語資料の翻訳を手伝ってほしいというので手伝ってあげた。	15
		小	同じ授業を受ける親しい後輩が本をちょっと見せてほしいというので見せてあげた。	16
	疎	大	同じ授業を受けるあまり親しくない後輩が英語資料の翻訳を手伝ってほしいというので手伝ってあげた。	17
		小	同じ授業を受けるあまり親しくない後輩が本をちょっと見せてほしいというので見せてあげた。	18

4. 分析結果

4-1 日韓の大学生に見られる感謝応答ストラテジー

与えられた感謝場面で日韓の大学生がどのような応答ストラテジーを選択したのかを分析した結果、〈表3〉の通り、日韓ともに「承認」、「否定」、「非言語表現」、「助けの意志の表明」の順で高く現れた⁽⁴⁾。しかし、使用の割合からみると、日本人大学生で

は「承認（40%）」と「否定（37%）」がほぼ同じく選択されているのに対し、韓国人大学生では「承認（52%）」が否定（23%）の2倍以上多くなっている。「非言語表現」は、日本人大学生の方で2倍近く、「恩返し」の要求」は韓国人大学生の方で5倍ほどそれぞれ多く選択されている。

表3 日韓の大学生における感謝応答ストラテジーの使用比較

感謝応答ストラテジー		日本人大学生		韓国人大学生	
		頻度	パーセント	頻度	パーセント
受け止め	承認	257	40%	388	52%
	相互感謝	9	1%	25	3%
	喜びの表出	8	1%	1	0%
	助けの意思の表明	20	3%	35	5%
	恩返しの要求	4	1%	41	5%
	不満の表出	2	0%	5	1%
	非言語表現	89	14%	57	8%
打ち消し 又は ごまかし	否定	240	37%	175	23%
	冗談	4	1%	20	3%
	謝罪	3	0%	1	0%
	話題転換	14	2%	3	0%
合計		650	100%	751	100%

以下に、〈表3〉に提示されている日韓の感謝応答表現の具体例について紹介する。

4-1-1 承認

「うん」、「どうぞ、召し上がれ。」、「그래. (はい。）」、「맛있게 먹어. (おいしく食べて。)⁽⁵⁾」のように、相手の感謝をそのまま受け入れることを意味する。感謝への応答として日韓ともに最も多く選ばれたストラテジーである。

4-1-2 相互感謝

相手側からの感謝の言葉に再度感謝の言葉で対応するストラテジーで、以前相手に助けてもらったことに対して恩返しをした時に多く見られる。「お互い様だよ。」、「あの時はありがとう。」、「아니야 내가 고맙지. (いやこちらこそありがとう。）」、「네가 해 준 거에 비하면 아무것도 아니야. (君がしてくれたのに比べれば何でもないよ。）」などがこれにあたる。

4-1-3 喜びの表出

自分の行為が相手に役立ったことへの喜びを表すもので、相手から頼まれて行った行為に対する感謝表現の応答として選ばれている。「力になれてうれしい。」、「도움이 됐다니 다행이야. (役に立ったなんてよかった。）」などがこれにあたる。

4-1-4 助けの意思の表明

相手の感謝に対して今後も助ける意思があることを示す表現で、「また何かあったら言ってね。」、「いつでも言ってください。」、「다음에도 도움 필요하면 말해. (また助けが必要だったら言ってね。）」、「다른 거 또 할 것은 없나요? (ほかにかできることはありませんか?)」などがこれにあたる。喜びの表出と同様、相手からの依頼で助けてあげた時の応答表現として選ばれている。

4-1-5 恩返しの要求

相手の感謝に対し恩返しを要求する表現で、「次は○○がおごってね。」、「何かおごって。」、「한턱 싸라~ (おごって~)」、「답에 니 차례. (次は君の番。）」、「고마우면 밥이 나 사라. (ありがたいならご飯でもおごって。）」、「기브엔데이크 알제? (ギブアンドテイク、知ってるよね?)」などがこれにあたる。韓国人大学生の方で5倍ほど多く選ばれているこのストラテジーは、友人または親しい先輩と後輩の関係で多く見られる。

「恩返しの要求」が感謝に対する応答として韓国人によく使われているという引(2016)を参照し、次の項目をDCTに追加して日韓の大学生は「恩返しの要求」についてどのように認識しているのかを調べた。

[授業時間にPPTを使って発表をしなければなりません、使い方が分かりません。そこで友人にPPTの使い方を教えてほしいと頼んだら、友人が親切に教えてくれました。枠内の下線を引いた部分についてどう思うのかを、①~⑤の中から一つ選んで○をつけてください。]

私 : 「教えてくれてありがとう。君がいなかったら大変なことになってたよ!」
友人 : 「今度ご飯ご馳走してね。」

①とても礼儀正しい ②やや礼儀正しい ③普通 ④やや失礼だ ⑤大変失礼だ

→④又は⑤を選択した理由: _____

分析の結果、恩返しを要求する上記の表現について、日本人大学生は「普通 (54%) > 失礼だ (38%) > 礼儀正しい (8%)」と回答しているのに対して、韓国人大学生は「普通 (48%) > 礼儀正しい (37%) > 失礼だ (15%)」と回答しており、日韓で異なる認識を示していた。

4-1-6 不満の表出

相手からの感謝に対し、依頼された仕事の内容が大変だったことを示すもので、「本当に疲れた。」、「진짜 힘들었어요. (本当に大変でしたよ。）」などがこれにあたる。DCTでは、教授の依頼でデータを検索したり、友人の依頼で翻訳を手伝うなど、負担程度が高いとされる場面で用いられている。日本人大学生では2名、韓国人大学生では5名と、低い頻度で選ばれている。

4-1-7 非言語表現

國廣 (1977) に基づいて、相手からの感謝に対し非言語行動で応答する場合を想定し、DCT の内容に「もし言葉にせずに態度で表現するなら、どのような態度をとるか書いてください。」という項目を設けて調査を行った⁽⁶⁾。分析の結果、日韓の大学生は「微笑み」、「真顔」、「頷き」、「鼻高」、「すまし顔」、「苦笑い」、「にこにこ」、「미소 (微笑み)」、「살짝 미소 (軽い微笑み)」、「웃음 (微笑み)」、「끄덕끄덕 (相づち)」などの非言語行動をとっていると回答した。

4-1-8 否定

相手の感謝に対して自分が行った行為を縮小あるいは否定する表現を指す。「いやいや」、「全然いいよ」、「大丈夫、全然平気」、「いいえ、とんでもないです」、「아니야~ (いやいや.)」、「전혀 전혀. (全然全然.)」、「아니야, 뭘 이 정도 가지고. (いや、何この程度で.)」、「별말씀을요. (どういたしまして.)」、「아니예요. 괜찮아요. (いいえ。大丈夫です。)」などがこれにあたる。韓国に比べ、日本の方で多く選択されている。

4-1-9 冗談

相手からの感謝に対し冗談で対応することで、主に親しい間柄で見られる。「あとで10倍にしておごってね」、「감사하면서 먹어라. (感謝しながら食べてね.)」、「이번이 처음이자 마지막이야. (今回は最初で最後だよ.)」、「니 월급날이 언젠데? (君の給料日いつなの?)」などがこれに当たる。韓国の方でより多様・多彩な表現が見られた。

4-1-10 謝罪

自分が相手に施した恩恵は感謝されるほどではないと縮小あるいは否定するストラテジーで、「ごめんね」、「こんなことしかできなくてごめんね」、「間違ってたらごめんね」、「더 좋은 거 못 드려서 죄송합니다. (もっと良いものを差し上げれず申し訳ありません。)」などがこれにあたる。日韓の感謝表現にも使われていた謝罪のストラテジーが (金・呉, 2020)、使用頻度はかなり低いものの、感謝応答の表現として同じく使われているということは非常に興味深い。

4-1-11 話題転換

相手からの感謝を軽く聞き流し、話題を切り替えることをいう。「勉強頑張ってるね」、「お疲れさま」、「仕事頑張ってください」、「수고해~ (お疲れ様~)」、「책 안 들고 왔어? (本、持って来なかったの?)」などがこれにあたる。

4-2 社会的変因を取り入れた場面別分析

本節では、同じ場面でいくつかの異なる状況をそれぞれ設定した DCT の調査結果に基づいて、状況によって日韓の大学生はどのようなストラテジーを選択しているのかについて分析を行う。感謝場面の設定にあたって、「自分からの好意で恩恵を施した場合」と、「相手からの依頼で助けてあげた場合」に大きく分け、さらに各場面を社会的地位、親疎

関係、負担程度の社会的要因を考慮したいくつかの状況に細かく分けて分析を行った。

4-2-1 自分からの好意で恩恵を施した場合

相手から何も頼まれていないが、自分から好意を持って相手に物質的な恩恵を提供する状況を設定して調査を行った。ここでは、(1) 好意で贈り物をあげた場合、(2) 好意で食事をご馳走した場合、(3) お礼の食事をご馳走した場合に場面を分け、それぞれの場面を社会的地位（上、同、下）と親疎関係（親、疎）という要因を取り入れて分析を行った⁽⁷⁾。調査対象である大学生の場合、物質的な好意は負担のない範囲で行うと想定し負担程度の軽い状況を設定したため、負担程度による分析は行っていない。

(1) 好意で贈り物をあげた場合

授業時間に自分より社会的地位の高い教授に旅行の土産で買って来たお菓子を渡した状況を設定し、教授との関係を、親しい場合と親しくない場合に分けて、それぞれどのように応答しているのか書いてもらった。この状況で、親疎に関係なく日本人大学生では「承認>非言語表現>否定」の順で、韓国人大学生では「承認>否定>非言語表現」の順で感謝応答ストラテジーが多く選ばれた。相手の社会的地位が自分より高い場合でも、日韓の大学生は「承認」を多く選択しているが、これはお菓子のように負担程度がそれほど大きくないということも要因として働いていると考えられる。しかし、親しくない教授に対して、日本人大学生では「承認」の割合が大幅に減少し、「否定」と「非言語表現」がそれぞれ1割強増えているが、韓国人大学生では「承認」が1割増え、親しい教授に選択されていた「喜びの表出」や「冗談」は全く見られなかった。そのほか、わずかではあるが、「謝罪 (3%)」のストラテジーがこの状況で韓国人大学生に見られた。

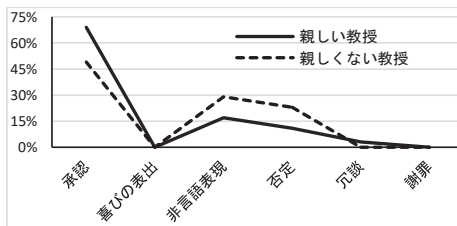


図1 日本人大学生

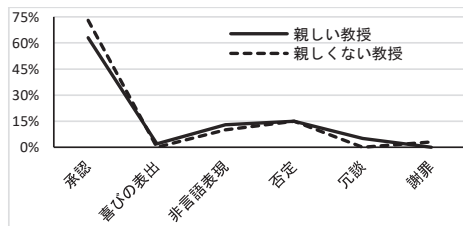


図2 韓国人大学生

(2) 好意で食事をご馳走した場合

アルバイト代をもらって、親しい友人や後輩に好意で昼食をご馳走した状況を設定し、それぞれどのように応答しているのか書いてもらった。この状況で、日本人大学生に多く選択されているストラテジーは、親しい友人の場合「承認 (80%) > 非言語表現 (9%) > 恩返しの要求 (6%) > 冗談 (3%) > 話題転換 (3%)」の順で、親しい後輩の場合は「承認 (83%) > 非言語表現 (9%) > 否定 (6%) > 話題転換 (3%)」の順で表れており、

相手に関係なく「承認」と「非言語表現」が多く選ばれていた。一方、韓国人大学生に多く選択された戦略は、親しい友人の場合「承認 (65%) > 恩返しの要求 (20%) > 冗談 (8%) > 非言語表現 (5%)」の順で、親しい後輩の場合は「承認 (88%) > 否定 (5%) > 恩返しの要求、非言語表現 (各2%)」の順であり、相手によって異なる戦略が選ばれている。例えば、親しい友人に向けては「고마우면 밥이나 사라. (ありがたいならご飯でもおごって。）」といった「恩返しの要求」が全体の2割を占めているが、親しい後輩に向けては2%と、大幅に下がっている。そのほか、親しい友人には全く使われなかった「否定」が、親しい後輩に向けて使われていた。「冗談」も日本 (3%) に比べて8%と、韓国の方で多くなっている。

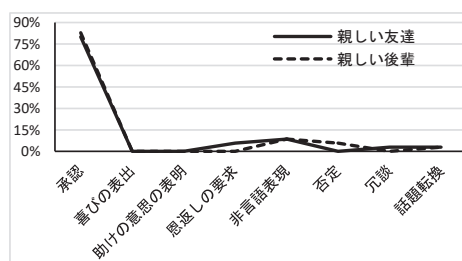


図3 日本人大学生

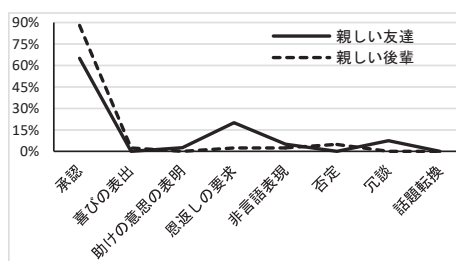


図4 韓国人大学生

(3) お礼の食事をご馳走した場合

自らの好意で親しい友人や後輩に食事をご馳走した場合とは異なって、ここでは何らかの状況で相手に助けてもらうなど、先日お世話になったあまり親しくない友人や後輩にお礼として昼食をご馳走する状況を設定し、それぞれどのように応答しているのか書いてもらった。この状況では相手に関係なく、日本人大学生では「承認>非言語表現>相互感謝>否定」の順で、韓国人大学生では「承認>相互感謝>否定>非言語表現」の順で選ばれている。親しくない友人や後輩に向けて、日韓ともに「あの時はありがとう。」、「아니야, 내가 고맙지. (いや、わたしこそありがとう。）」といった「相互感謝」が選ばれているが、これは他の状況では全く表れていない。なお、日本では親しくない友人や後輩に向けて「非言語表現」が、韓国では「相互感謝」が、相手側に比べそれぞれ2倍ほど多く用いられていた。

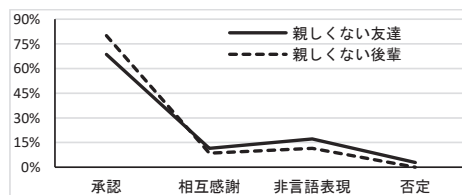


図5 日本人大学生

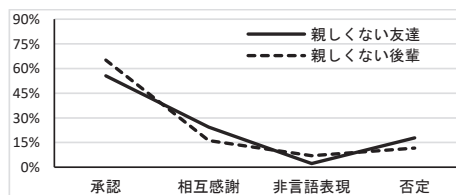


図6 韓国人大学生

4-2-2 相手からの依頼で助けてあげた場合

相手から頼まれて助けてあげた場合を想定し、社会的地位と親疎関係、負担程度の社会的要因を考慮したいくつかの状況を設定して調査を行った。紙面の都合上、本稿では一部のみを提示している。

(1) 教授の依頼で助けてあげた場合

数日間にかけての資料の収集といった負担程度の高い依頼と、資料のコピーといった負担程度の軽い依頼について、親しい教授の場合とあまり親しくない教授の場合を設定し、教授から「ご苦労様」や「ありがとう」と言われたら、どのように応答するのか書いてもらった。この状況で、日本人大学生では、教授との親疎や負担程度に関係なく「否定」のストラテジーが最も多く見られた。一方、韓国人大学生では教授との親疎に関係なく、負担程度によって異なる応答表現が選ばれており、負担程度が高い場合は「否定」が、低い場合は「承認」がそれぞれ多くなっている。そのほか、「いつでも言ってください。」「다른 거 또 할 것은 없나요? (他に何か手伝うことはありませんか?)」といった「助けの意思の表明」の場合、日本では親しい間柄で選ばれているのに対し、韓国では親疎に関係なく、負担程度の高い状況で多くなっている。

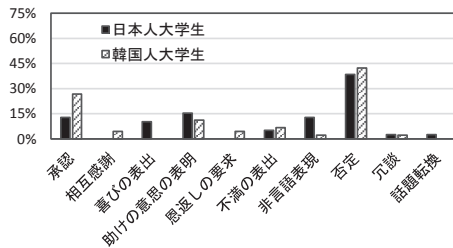


図7 親しい教授の依頼で助けてあげた場合
 (負担程度の高い依頼)

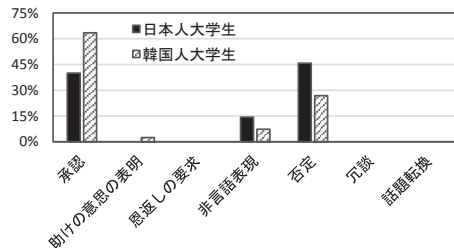


図8 親しくない教授の依頼で助けてあげた場合
 (負担程度の低い依頼)

(2) 友人の依頼で助けてあげた場合

英語の翻訳といった負担程度の高い依頼と、本を見せてもらうなど負担程度の低い依頼について、親しい友人とあまり親しくない友人の場合を設定し、友人から「ありがとう」と言われたら、どのように応答するのか書いてもらった。この状況で、日本では親疎や負担程度に関係なく、「否定」が最も多い割合で選ばれており、親しくない友人に対しては「否定」の割合が8割以上を占めている。一方、韓国では負担の大きい場合、友人との親疎によって好まれるストラテジーが異なっており、親しい友人には「한턱 싸라~ (おごって~)」といった「恩返しの要求 (38%)」が、親しくない友人には「否定 (50%)」が最も多くなっている。また、韓国では親しくない友人に対して「助けの意思の表明 (7%)」を、親しい友人には「冗談 (7%)」を感謝への応答としてそれぞれ選択している。

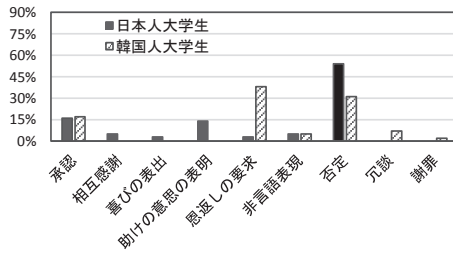


図9 親しい友達で依頼で助けてあげた場合
(負担程度の高い依頼)

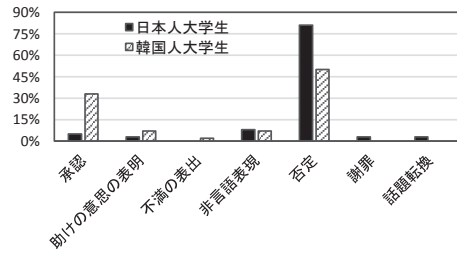


図10 親しくない友達で依頼で助けてあげた場合
(負担程度の高い依頼)

(3) 後輩の依頼で助けてあげた場合

英語の翻訳といった負担程度の高い依頼と、本を見せてもらうなど負担程度の低い依頼について、親しい後輩とあまり親しくない後輩の場合を設定し、後輩から「ありがとうございます」と言われたら、どのように応答するのか書いてもらった。この状況で、日本人大学生では負担が大きい場合、親疎に関係なく「否定」が5割以上を占めており、親しい後輩には「助けの意志の表明(16%)」が、親しくない後輩には「非言語表現(13%)」がそれぞれ多く選択されている。一方、韓国では後輩から依頼された場合、親疎に関係なく「承認」のストラテジーが最も多くなっている。ただ、親しい後輩から負担の大きい依頼を受けた場合、「承認(27%)」と同じく「否定(27%)」や「恩返しの要求(24%)」も高くなっているのに対し、親しくない後輩から負担の大きい依頼を受けた場合は「承認」が5割と高くなっている。また、日本では相手や負担程度に関係なく、親しい関係で「助けの意思の表明」が高く表れているのに対して、韓国では親しくない関係で「助けの意思の表明」が多くなっている。そのほか、日本では負担程度の高い依頼で「冗談」が全く見られなかったのに対し、韓国では負担程度が高くても親しい関係に限って「冗談」が表れている。

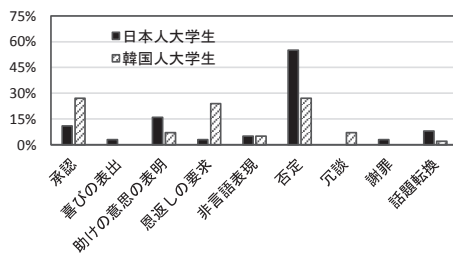


図11 親しい後輩の依頼で助けてあげた場合
(負担程度の高い依頼)

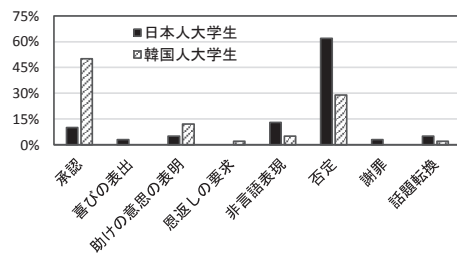


図12 親しくない後輩の依頼で助けてあげた場合
(負担程度の高い依頼)

5. 考察

第4章では、DCTで設定した感謝場面で日韓の大学生はどのような応答表現を選択しているのかを提示し、さらに各場面に上下・親疎関係、負担程度などの社会的要因を取り入れて分析を行った。その結果、感謝場面で日韓の大学生に最も多く選択されたストラテジーは「承認」、「否定」、「非言語行動」であった。「否定」は、感謝場面で相手が感じる負い目を軽減させることで均衡を取ろうというストラテジーで、自分の施した恩恵を縮小または否認することを指す。感謝をされたり褒められたりする場面の応答として日韓でよく見られるが、これは相手からの感謝や褒めへの「否定」が謙遜の意味合いを持つと解釈されているためであろう。使用割合からみると、「承認」は韓国の方で高くなっているが、「否定」は日本の方で高くなっている。韓国で多く見られた「承認」の場合、負担程度が低ければ低いほど、親しい人よりは親しくない人、目上や友達よりは目下に対してより割合が高くなっている。韓国で「否定」または打ち消しのストラテジーは、負担程度が高い場合に相手の心的負担または負い目を軽減させるためのストラテジーとして用いられている。しかし、相手側からの依頼の負担がごく軽い場合でも「否定」をすると、自分の施した恩恵がそれほど大したことではないため、かえって相手に不自然さを感じさせる恐れもある。そのため、負担程度の軽い場合は「承認」によって、さほど大した依頼ではなかったことを指標していると解釈できる。また、年齢を問う表現の豊かさからもわかるように（日本放送協会・NHK出版、2016）、社会文化的に年齢が重要な位置を占めている韓国では、負担程度の低い場面での目下の人からの感謝は、軽く認めてもそれほど礼儀に反しないという意識が働いていると思われる。「非言語表現」も日韓で多く見られる。西（2006a）によると、日本では感謝の内容が極めて軽い場合、微笑みや会釈などの非言語表現で応答することが多く、感謝の内容が比較的重い場合は「いいえ、とんでもありません。」などの言語表現を用いる傾向がある。また、召（2016）によると、韓国でも感謝の内容が比較的軽い場合に「非言語表現」が用いられるが、それ以外にも、謙遜を表すための手段として、あるいは相手とあまり親しくない場合、気まずい場から抜け出し会話を終了させるために「非言語表現」が用いられている。今回の調査によると、「非言語表現」は韓国に比べ日本の方で相手に関係なくより広く用いられているが、日韓ともに負担程度の軽い場合でより高く表れている。ただ、今回は実際の場面での会話ではなくDCTによる調査であったため、「非言語表現」をさらに詳しく見ていくためには、生のデータを収集して観察する必要があるだろう。

「承認」や「否定」、「非言語行動」以外に、韓国で多く見られたのが「恩返しの要求」で、日本人大学生に比べ5倍ほど多くなっている。「恩返しの要求」について日韓の大学生はどのように思うのか調査を行った結果、日本では失礼だと認識した学生が多いのに対し、韓国では特に問題ないと回答した学生が多く、相互の認識に食い違いがあった。これは、恩返しの手段における日韓の文化の違いを反映するものと考えられる。即ち、相手に負担の大きい依頼をして助けてもらった場合、日本では「助かりました。」など、相手側の役割を強調するお礼の言葉で十分だと認識する傾向があるのに対し、韓国ではお礼の言葉だけで済ませず食事をご馳走したり、後日に贈り物をするなど、物質的に恩返しをしようとする傾向がある（金・呉、2020）。筆者（呉）が時間をかけて研究に協

力してくれた韓国の親友にお礼の言葉を伝えたら、「말만? (言葉だけなの?)」と言われたことがある。本当にありがたいと思うなら、言葉だけで済ませずに何か行動で証明しろという冗談を込めた応答で、筆者も笑いながら「알았어. 다음에 밥 살게. (わかった。今度ご飯おごるから。)」と答えている。このように韓国では、負担程度の高い依頼の場合、「恩返しの要求」はさほど失礼な行動ではなく、負い目のバランスを調整するためのストラテジーとして機能している。今回の調査で、「恩返しの要求」は主に親しい友人に対して用いられており、特に親しい友人から負担の大きい依頼を受けて助けてあげた場合に使用頻度が高くなっている。なお、親しくない相手や負担程度が低い場合は全く選択されていなかった。

同じような場面や状況でも、社会的地位や親疎関係、負担程度といった社会的要因に応じて、日韓で異なるストラテジーが選択されている。教授のように、社会的地位の高い人に好意でお菓子などの贈り物をして感謝された場合、教授との親疎に関係なく日韓で最も多く現れたのは「承認」である。ただ、日本では親しくない教授に対しては「承認」が2割減少し「非言語表現」や「否定」がそれぞれ1割強増加したのに対し、韓国では同じ状況で「承認」がさらに増加し、珍しく「謝罪」のストラテジーが見られるなど、日本に比べ用いられるストラテジーの種類がより豊富であった。韓国人大学生に見られるストラテジーの多様性は親しい教授の場合、さらに鮮明に表れている。日本でも親しい教授に対して「冗談(3%)」が表れているが、韓国では「冗談(5%)」に加え「喜びの表出(2%)」なども用いられており、親しい教授には距離を縮めるポジティブ・ポライトネスが、親しくない教授には「謝罪」など距離を置くネガティブ・ポライトネスが、低い割合ではあるが、それぞれ選択されていた。

好意で食事を後輩や友人にご馳走した場合、日本ではお世話になった相手なのかどうかという状況や、相手との親疎に関係なく、「承認」と「非言語表現」が高く用いられている。また、お礼として食事をご馳走した場合、親しくない相手には友人なのか後輩なのかに関係なく「相互感謝」が多く用いられている。一方、韓国では相手が友人か後輩か、相手との関係が親しいかどうか、お礼でご馳走したのか自らの好意でご馳走したのかという状況によって、好まれるストラテジーが異なっている。例えば、親しい友人に自らの好意で食事をご馳走した場合は「恩返しの要求」が高い頻度で選択され「冗談」も表れているのに対し、親しくない友人や後輩にお礼として食事をご馳走した場合はこのようなストラテジーは見られず、「相互感謝」や「否定」が多くなっている。また、親しい後輩に自らの好意で食事をご馳走した場合は「承認」が9割弱を占めており、「恩返しの要求」や「冗談」などは殆ど用いられていない。即ち、韓国では上下関係において自分と同等の立場にある友人の場合、「다음엔 네가 사라. (次は君がおごって。)」など恩返しを要求するストラテジーを選択することで、負債によって崩れた人間関係のバランスを修復しようと努力するが、目下の後輩にはこのような努力は行われていない。その代わりに、後輩からの感謝を軽く受け入れたり、食事のご馳走はそれほど大したことではないという意味での「否認」のストラテジーが選択されている。後輩に食事をご馳走することは、先輩または目上の人にとってそれほど大したことではなく当然のように認識する韓国文化の断面がうかがえる。

自分の好意ではなく相手からの依頼によって助けてあげた場合、日本では、相手や相手との親疎、負担程度に関係なく全体的に「否定」が最も多く選ばれている。一方、韓国では負担程度が高い状況で、上下・親疎関係といった社会的要因によって異なるストラテジーが選択されている。例えば、年齢や社会的地位の面で自分より上の教授には親疎に関係なく「否定」が好まれているのに対し、親しい友達には「恩返し」の要求が、親しくない友達には「否定」が、後輩には相手との親疎に関係なく「承認」がそれぞれ好まれて選択されている。目上の人には「否定」によって謙譲または謙遜の態度を表そうとしており、目下の人には「承認」によって、目上の人が目下の人を助けてあげることにはある意味で当たり前だという意識が韓国人大学生において働いていると考えられる。また韓国人大学生は、親しい友人に対しては「恩返し」の要求」といった、相手の顔(face)を露骨的に脅かす行為(bald on record)あるいはポジティブ・ポライトネスを、親しくない友人には「否定」というネガティブ・ポライトネスをそれぞれ使い分けることによって、人間関係の調整を巧みに行っている⁽⁸⁾。相手に依頼をするということは、それ自体でFTAに該当するが、上記の分析結果から見ると、日本では負担のかかるすべての状況において、相手や上下・親疎といった社会的要因に関係なくネガティブ・ポライトネスを、韓国では負担程度の高い場合、社会的要因に応じてポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスをストラテジーとして使い分けている。

6. 本稿の限界と今後の課題

本稿では、上下・親疎関係、感謝の内容における負担程度などを細かく設定したDCT調査を行い、日韓の大学生は相手からの感謝に対してどのように応答しているのかについて分析及び考察を行った。分析の結果、日韓の大学生は、教材用のテキストに典型的に見られる「いいえ」や「どういたしまして」以外に、与えられた場面や状況に応じて社会的要因を反映しながら様々な応答表現を選択して使い分けていた。特に、好意で相手にお土産などをあげて感謝された場合、韓国では「별거 아니예요. (大したことないです)」という応答がほぼ定型化して用いられていた。また、「恩返し」の要求のように、日本では失礼な言語行為として誤解される余地のある表現が、韓国では親しい友人に多く用いられるなど、同じような応答表現が日韓で異なって解釈される場合もあった。

本稿は、これまであまり注目されていなかった感謝場面における応答に注目し、日本と韓国の感謝に対する応答表現を対照的観点から分析した初めての研究である。データ収集の容易さから本稿ではDCT調査に基づいて分析を行っているが、実際行われた自然談話を分析の対象にした場合、本稿と異なる分析結果が導き出される可能性もある。なお、本稿では日韓の大学生を対象に調査を行っているため、年齢の要因は分析に反映されていない。また、今回の調査に参加した日本人大学生が女性に偏っており、性別の要因も分析の対象から外されている。そのほか、調査集団の規模が小さかったため、統計分析プログラムによる細かい分析は行われていない。本稿の成果を踏まえ、今後このような問題点を改善することにより、感謝場面における応答表現の研究をさらに発展していきたい。

注

- (1) 本稿では、様々な場面における感謝への応答表現について、話者が意図を持って行う戦略的な言語行動として解釈しており、「応答表現」と「ストラテジー」が混在して用いられている。
- (2) 本調査の対象である大学生の場合、物質的に負担となるような行為を施すことは難しいと想定し、〈場面Ⅰ〉では、負担程度における社会的要因は項目から外している。なお、負担程度は、相手からの依頼で助けてあげた場合、どれくらいの手間や時間がかかるのかを基準に決めている。
- (3) 男女構成比は、日本では女子学生 36 人と男子学生 1 人、韓国では女子学生 29 人と男子学生 11 人となっている。
- (4) 応答ストラテジーの分類は、召 (1995) を参考に、今回の DCT 調査で得られたデータを帰納的に分析して行っている。
- (5) DCT の項目に自分からの好意で食事をご馳走する内容があったため、それに関連して「食べて」のような表現が多く見られた。
- (6) 非言語表現は単独で現れる場合もあり、言葉と共に現れる場合もあるが、DCT による調査だったため、非言語表現が単独で現れる場合に限っている。
- (7) 本稿では、日韓の大学生がどのように感謝への応答を行っているのかを考察するにあたって、両国の大学生にとって身近な場面を設定しようと心がけた。筆者らの経験によると、普段から世話になっている人に贈り物をあげたりご馳走するという行為は日韓に共通して広く見られる。
- (8) Brown and Levinson (1987) によると、円滑な人間関係を維持するために、人々は互いに相手の顔 (face) を配慮しながらコミュニケーションを行う。やむを得ず相手の顔 (face) を脅かす行為 (Face Threatening Act, 以下 FTA) を行う場合、その程度によって、(1) 露骨に FTA を行う、(2) 相手のポジティブ・ポライトネスを配慮するストラテジーを行う、(3) 相手のネガティブ・ポライトネスを配慮するストラテジーを行う、(4) FTA をほのめかす、(5) FTA を行わないという 5 つのストラテジーを使い分けることになる。なお、FTA は聞き手と話し手の社会的距離や力関係、各文化における FTA の負担度によって決まる。この理論によると、親しい友人のように、社会的距離が近く力関係が存在しない相手に対して、自分が行った助けの代価としてお茶や食事など負担度の低いものを要求する露骨な FTA を行っても、韓国文化では円滑な人間関係の維持にそれほど影響しないと解釈できる。さらに、このような類の FTA を行うことは、相手と自分の関係は露骨な FTA を行ってもいいほど社会的距離が近い、あるいはその関係でありたいという欲求を尊重する行為であるとも解釈できる。このような観点からみると、韓国文化における親しい友人に対しての「恩返し」の要求は、相手との距離を近づけたいというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると解釈することも可能であろう。

参考文献

- 金明熙・呉惠卿 (2020) 「日・韓における大学生の感謝表現の比較研究」『教育研究』 62, 1-20.
- 國廣哲弥 (1977) 「日本人の言語行動と非言語行動」『岩波講座日本語 2 言語生活』 岩波書店, 1-32.
- 西香織 (2006a) 「ありがとうと言われたらー鹿児島市における意識調査及び街頭調査を通じてー」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報』 37, 1-15.
- 西香織 (2006b) 「感謝に対する応答の指導についてー日本語教育の視点から」『鹿児島県立短期大学人文学会論集人文』 30, 25-41.
- 日本放送協会・NHK 出版 (編) (2017) 『レベルアップ・ハングルラジオ講座～違いを楽しむコミュニケーション術～』, 10月-12月.
- Brown, P., & Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York, NY: Cambridge University Press.
- Coulmas, F. (1981). Poison to your soul: Thanks and apologies contrastively viewed. In F. Coulmas (Ed.), *Conversational routine: Explorations in standardized communication situations and prepatterned speech* (pp.69-91). The Hague: Mouton.
- Jakobson, R. (1960). Linguistics and poetics. In T. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp.350-377). Cambridge, MA: MIT Press.
- Malinowski, B. (1923). The problem of meaning in primitive languages. In C. K. Ogden, & I. A. Richards (Eds.), *The meaning of meaning* (pp.296-336). London, England: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co.
- 김영채 (2016) 『한국어 감사 응답의 양상』 홍익대학교대학원 석사학위논문.
- 김정연 (1995) 『영한 화행 대조 분석 - 감사와 그 반응을 중심으로 -』 서울대학교 대학원 석사학위논문.
- 박은영 (2000) 『영어권 한국어 학습자와 한국어 원어민의 화행 실현 비교 연구 - 사과와 감사 응답을 중심으로 -』 이화여자대학교, 석사학위논문.
- 조윤형 (2017) 『한국어 감사 반응 화행 연구』 연세대학교 대학원 석사학위논문.

(呉惠卿－国際基督教大学, 金明熙－駿台外語&ビジネス専門学校)

A Comparative Study of Japanese and Korean College Students’ Response to Gratitude

Hye-Gyeong OHE, Myeong-Hee KIM

This research focuses on how speakers respond to expressions of gratitude in Japanese and Korean from a contrastive perspective. This analysis of the DCT data from Japanese and Korean college students targets how they perform linguistic strategies in the speech situations of gratitude. The results show that the college students from each country used a variety of linguistic strategies in responding to gratitude reflecting the degree of the interlocutors’ relationship, indebtedness, intimacy and social status. Some strategies were misinterpreted causing misunderstanding: Korean students chose “request of reward for their kindness” as a strategy with their close friends while Japanese students regarded the response to the same situation as impolite or rude. This study can enable the learners of Japanese and Korean to perform appropriate linguistic strategies by considering a variety of social factors in the situation of gratitude.

(Ohe: International Christian University, Kim: Sundai College of Business & Foreign Languages)